

太宰治・「陰火」論

△序▽

津軽地方屈指の大地主の第十子六男として生まれた津島修治が、本質的に△他者▽と出会い、自己と生家を客観視できるようになるのは、彼の青春後期、つまり、弘前高校入学以後のことである。弘前高校に入学したとき、そこにはすでに生家の「△源」の権威を憚かる者も、彼の△道化▽で籠絡できる単純な生徒もいなかった。むしろ彼らはひとかどの主張と思想をもった個性として修治に對峙し、彼をしのぐ知性も幾人も見つけることができた。また、年譜によれば、入学の年、七月に、芥川龍之介の自殺の報に接して衝撃を受け、八月頃、突如、義太夫を習い始め、やがて花柳界にも出入りするようになったとあり、これらは以後の津島修治の青春の意味を考えるうえで、いずれも見落すことのできない重要な事項と考えられてもいる。しかし、これらの事実をすべて認めたくえでなお、津島修治が、自己と生家の存在の意味を自覚的、客観的に見る眼を養うのに最も大きな力のあったのは、高校入学後初めて本格的に出会ったマルキシズムである。高校に入った最初の作品「無間奈落」が、大地主である生家を告発しようとした

川崎和啓

最初の作品として知られているように、この作品の背後には明らかにマルキシズムの影響がある。「無間奈落」は昭和三年の一〜三月ごろに執筆されたと推測されているから、津島修治はそれ以前、つまり弘前高校に入学した昭和二年四月から同十二月ごろまでには、確実にマルキシズムの洗礼を受けたわけである。換言すれば△自己▽と△家▽とを客体化する彼の眼は、マルキシズムというフィルターを通じて得られたものであった。しかし、このフィルターはこの時点ではまだ脆弱であったらしく、「無間奈落」はその作品意図に敏感に反応した長兄文治の横やりで、未完のまま中断してしまうことになる。

津島修治が再び左翼小説に手を染めるのは翌四年二〜三月のことである。同三月十日に脱稿したと推定されている「虎徹宵話」¹は、青年修治が再度左傾の度を深めたことを明確に伝えているが、そのきっかけになったのは、同年二月に発覚した、弘前高校長鈴木信太郎の公金無断流用事件と、それに伴う弘前高校生による同盟休校事件である。同盟休校により校長排斥に成功したこの事件は後に「学生群」の素材ともなるが、「虎徹宵話」以降の作品——「哀蚊」（初出）、「花火」——地主一代「学生群」——を読めば、青年修治がこの事件を契機に極度に左

翼意識を高揚させていったことがはっきりわかるのである。

ところで、「無間奈落」を未完のまま放擲してから「虎徹宵話」を執筆するまでの約半年間、津島修治は彼のマルキシズムをどのように処理していたのだろうか。この期間に執筆された作品は「股をくぐる」「彼等と其のいとしき母」「此の夫婦」「鈴打」の四篇だが、マルキシズムを閑却したかに見える。この期の津島修治の意識を見るには、「此の夫婦」が最も適当だろう。「此の夫婦」は四篇中で唯一、「唯物論者」「社会主義者」「プチ・ブル」などの言葉が出てくる作品であり、いったんマルキシズムから撤退したこの期の修治の精神の存りようを最もよく伝えている。そして、この作品に示された精神の存りようをさぐることは、たぶん、「陰火」の作品理解にも何らかの示唆を与えてくれると思われる。

△▽

太宰治の初期作品中の左翼小説には一つの大きな特徴がある。それは異様なほどの△性▽へのこだわりである。彼がマルキシズムの立場から作品を書くとき、その批判の対象となるのはつねに彼と彼の生家である。たとえ、直接的な素材が秋田県の△阿仁前田の小作争議▽であるうと、弘前高校の同盟休校事件であるうと、彼がその中で最も問題にし、こだわるのは、本質的には彼自身の△家▽と、そこで育まれた彼自身の△感性▽ないしは△血▽だと言ってよい。「虎徹宵話」だけが例外)。彼の創作意図は明白なのであって、彼は一貫して△家▽と△自己▽にひそむブルジョアの悪徳をあばき出し、告発しようとする。しかし、奇妙なことに、そのあばかれる悪徳のほとんどが彼らの

△性▽なのである。

一般的に言って、マルクス主義文学がその作品によって指弾するのは階級的な悪徳でなければなるまい。△地主▽を例にすれば、それはたとえば、あくどい搾取の実態であったり、小作人に対する非道なふるまいであったり、階級闘争に対する卑劣な敵対行為であったりするはずだ。ところが彼の作品では、△阿仁前田の小作争議▽に取材したと言われる「地主一代」にそのような場面が描かれているだけで、他はその△悪徳▽が問題にされるときは、ほとんど△性▽がらみなのである。たとえば、「無間奈落」は、現在、「序編 父の妾宅」と題された第一回発表分しか目にする事ができないが、そこで「放蕩極まる好色漢」とされている「大村周太郎」は、津島修治の父源右衛門がモデルである。修治は父源右衛門が実際に妾を囲っていたことを知っていたらしいが、おさだという女中が周太郎の妾になり、彼の子供を妊娠出産したあと、彼女が周太郎のために無惨に発狂させられるストーリーをこしらえている。金と権力をカサに花柳界でも羽振りのよかつた周太郎が、「賢くさうな眼」と「純真な無垢」をもった一人のうら若い女性を妾にしたあげく、無慈悲にも発狂させるといふストーリーで、大地主であった父源右衛門がその「裏面」では「放蕩極まる好色漢」だったとして、彼の悪徳を印象づけようとしているのである。また、この作品では修治自身をモデルにした大村乾治という周太郎の息子も登場するが、彼はこの作品の前半部で、徹頭徹尾、△性▽に対して異常な興味と関心を示す「色餓鬼」として描かれている。

事情は他の作品でも同様であって、初出の「哀蚊」では、「なぜ百万長者のお家では悪巧をしねばならぬかを先づ考へて御覧遊ばしませ。

そして又私が只今、物語ります幽霊も、なぜそれがドロドロ現はれねばならなかつたかを研究遊ばしませ。私がこの物語りをなすのも、つまりは其れが目的なのでございますから」と述べたあと、「姉様が養子をと」った「御祝言の晩」の「真夜中近く」「婆様が寢床をぬけ出し、「幽霊」のように、「姉様と今晩の御躰様とお寝になつて居られるお部屋を覗いて居る」様子が語られている。また「花火」では、「有閑階級」に属する脳梅毒の「兄貴」が、自分の「病的な獸欲」によって小間使の少女に「猛烈な病毒を感染させ」て死なせてしまう。そして、この話はほとんどそのまま「地主一代」でも使われている。津島修治が生家を告発し、その悪徳をあばくのになせこんなにもハ性Vにこだわることか、その本当の理由はよくわからない。ただ、「学生群」の、有名な「(C) 敗惨者」の章で、青井が小早川相手に、「さうぢやない、君達はプチ・ブルだし、僕はブルジョアだ。僕には君達の持つて居ない色々な血が流れて居る。一番手つ取り早い話が、僕には父の頹廢的な放蕩の血がぬらぬらと流れて居る」と嘆くように、彼はハ放蕩Vやハ性Vの頹廢をブルジョアに固有のものと、どこかで信じていた。そのため、自己のブルジョア性を告発しようとするれば、彼はどうしても自己のハ性Vにこだわらざるをえなかつた。あるいは、ハ性Vを武器にブルジョア批判を展開せざるをえなかつた。「哀蚊」で「婆様」にまで好色なハ性Vの姿を見出し出したように、彼はさまざまにハ性の頹廢Vを描くことでハ家Vならびにハ自己Vにひそむブルジョアの頹廢・ブルジョアの悪徳を告発しようとするのである。津島修治にとつてハ性V描写は、己のブルジョア性を剔抉するうえで、欠くべからざる必須のものであった。

*

ところで、「此の夫婦」にも頹廢的なハ性Vの模様が描かれている。しかし、この作品に登場する夫婦は、すでにブルジョアでもなければ有閑階級に属する金満家でもない。夫の光一郎は大学時代こそ「一端の社会主義者を気取つて」いたが、いまは「二三の怪しげな雑誌に、卑猥な、うそ寒い連載ものを書いては、お恥しい程の稿料を稼ぐ」「文字通りの雑文家」である。彼が社会主義から脱落する直接のきっかけとなつたのは、ある職工に「てめえは、どうせプチ・ブルよ。へん、人道主義にぼさんぼさんと毛の生えた奴さ」などと言われたことだった。彼はその後、故郷の「若い芸者に惚れ」て結婚するが、今では、「もうもう浮世には疲れちやつたし此の上生活意識をどうのかうのも凄じい」と、「無意志の生活」を送っているのである。その光一郎の所へ弟の龍二が夏休暇を利用して帰省してきた。「弟と一緒に夕食を戴く最後の夜、八畳一間しかない粗末な家の中で、妻は弟と秘かに通じたようであった。しかし、根っから「帮間的分子」をもつ光一郎は、そのことを問いつめもせず、逆に旅立つ弟のために一緒に写真を撮つてやり、妻にその現像を命ずるのである。妻が弟を助手に、暗室代わりの押入れに入ると、光一郎は昨夜の疑念が頭をよぎり、嫉妬に苦しめられる。しかし、彼は怒るところか、反対に、「僕を捨てないで呉れ」と「二人に哀願してもいい」と思う。そのうち二人は現像を終え何ごともなく押入れから出てくるが、弟が出発してしまつと、光一郎は自分の欲情を押さえられず、「妻の両手をむすど握」み、彼女にいどみかかるのである。

妻を暴々しく、ぐいぐい引きずり、押し入れの中にはこんと投げ入れた。……

噫、此の暗室の中で、此の悲惨な夫婦が一体何をしようと言ふのだらう。

世にも凄絶したるけはひが、この暗黒の内に蠢いて居る。

これは単なる情欲か。

これは単なる情欲か。

彼はがくがくんと身体を震はしながら、じわじわ妻を押しつけて行つた。

凄惨な△性▽の修羅場と言うべきだらうか。この作品は、後に初代と従弟の不義に苦しめられることになる太宰治の運命とあまりにも符合する所が多い。しかし、この符合には文字通り△偶然▽以上の意味はない。むしろ、問題とすべきは、この時期に津島修治がなぜこのような△性▽の修羅場を描いたのか、ということであらう。当時、弘前高校の新聞雑誌部の委員をしていた平岡敏男は、この作品に関する記憶をもって次のように記している。

その家の一室で、かれは、私と相對座したのであるが、依然として相手の顔を正視しない、おどおどしたようなものごして「これが私の今の気持ちなんです……」と前置きして、いきなりかれの近作を読み出した。

「近作」とはもちろん「此の夫婦」のことである。平岡の記憶では、

彼が津島修治に新聞雑誌部委員への就任依頼をして間もなくのころであつたらしい。左翼的雰囲気が極めて色濃い新聞雑誌部の委員になることを要請された修治は、どういうつもりで「これが今の私の気持ちなんですが」と言ったのだらうか。また、この作品のどこに「私の今の気持ち」が描かれているのだらうか。もしこの作品に修治の「今の気持ち」が描かれているとすれば、それは当然、主人公の光一郎を通じてでなければならぬ。

ところで、太宰治以後を生きている私たちは、すでに△性▽が文学の中でさまざまな役割を果たしうることを知っている。たとえば、田村泰次郎にとって△性▽と暴力は、敗戦直後の混乱した世相の中で存在の荒々しい自己主張であつたし、石原慎太郎にとって△性▽は、旧道徳に対する強烈なアンチテーゼであつた。また、吉行淳之介は、自分の孤獨な精神を表徴してみせるには、娼婦との△性▽を描くことが最も有効だと信じた。彼らにとって△性▽は、創作目的というよりは、むしろ創作上の手段であつた。△性▽を手段にして己の形而上学を語ろうとしたのだ。状況は「此の夫婦」にあつても同様であつて、ここでは△性▽は作品の究極の目的ではない。△性▽は光一郎の精神の荒廃・墮落を描くのに最も有効な手段として機能している。

光一郎は先も見つたように、かつては「一端の社会主義者を気取つて」いたが、今は「文字通りの雑文家」として「無意志の生活」を送っている。彼は妻の不貞にさえ怒ることができぬほど、無気力な精神状態に陥っている。彼がいま精力を傾けて行えるのは、わずかに△性▽の妄想と嫉妬に情念を燃えあがらせ、妻を凌辱することだけなのだ。彼のこの△性▽の修羅道は、彼のニヒルでデスペラートな精神に通じて

いる。△性▽の頹廢がそのまま精神の頹廢を表徴しているのである。つまり、津島修治は、長兄文治の圧力で「無間奈落」が頓挫したあとの、換言すれば、彼の最初のマルキシズムが挫折したあとの、精神の倦怠と墮落を、光一郎の△性▽の頹廢を通じて描こうとしたのである。「私の今の気持ち」とは、光一郎の△性▽を通じて浮き彫りにされる、修治自身の後退した頹廢的な△生▽と△心▽に違いなかった。

津島修治は、どこかで性的頹廢をブルジョア固有のものとして信じていた。そのため、彼が左翼小説で描く△性▽はブルジョアの悪徳そのものであり、それはブルジョアへの直接的批判であった。しかし、「此の夫婦」では、△性▽は社会主義運動から脱落したプチブルのなれの果てを、あるいは、その心的荒廢を表徴する最も有効な手段として機能している。初期作品において、津島修治が△性▽をこのように取り扱った例は他にはない。

△二▽

「晩年」以後の太宰治は、きわめて△性▽に関する描写の少ない作家だった。△恋▽が描かれることはあっても、△性▽が露骨に描写されることはまず皆無である。その中において「陰火」にだけは△性▽の匂いが漂っている。たとえば次のような指摘がある。

四つの掌篇には、珍しくいずれにも性的結合を暗示する表現がある。だが、いずれも、男女は食い違い、両者の間には無限の距離感があり、その性はなにか暗い罪の影をひきま⁽³⁾ずっている。

これは「陰火」を解析する場合、きわめて重要な視点である。「陰火」は「誕生」「紙の鶴」「水車」「尼」の四篇から成るが、この作品には間違いなく、一對の男女の荒廢した△性▽が描かれているからである。

「陰火」では、同一テーマをもつ複数の掌篇を配して一篇を構成するという、きわめて実験性の高い手法が用いられている。同様の手法を用いたものに「逆行」「ロマネスク」があり、これらはいずれも昭和八年から九年にかけて執筆・脱稿したと推測されている⁽³⁾。この「陰火」については、奥野健男氏の「逆行」と「対をなす作品」との指摘がある⁽⁵⁾。氏はどうして「対」なのか、その具体的内容は語っていないが、「逆行」が最初の掌篇「蝶蝶」で二十五歳の「老人」の△死▽を語るのに対し、「陰火」が冒頭に掌篇「誕生」を配していることを指しているのだろうか。しかし、それにしても、「陰火」に登場する男女を順に見ていけば、ここにも△逆行▽の意識が働いていることがわかる。△子供△の誕生した夫婦▽（誕生）↓△子供△を産む前の若い夫婦▽（紙の鶴）↓△独身の恋人同士▽（水車）↓△恋人△もない独身の若い男▽（尼）という具合にである。つまり、「誕生」に登場する男の△生▽の意味は、△紙の鶴↓水車↓尼▽と△逆行▽することによって明らかになる構造になっている。また、「ロマネスク」は「仙術太郎」「喧嘩次郎兵衛」「嘘の三郎」の三篇から成るが、「嘘の三郎」では最後に、△太郎▽と△次郎△兵衛▽を再登場させ、△三郎▽が三人の△生▽の意味を総括し、「私たちは芸術家だ。王侯といへども恐れない」という気焰をあげる。事情は「陰火」でも同様であって、最後の「尼」で、「誕生」「紙の鶴」「水車」に登場した男たちの△生▽の意味を△尼▽が象徴的に総括して語っているように見える。

「陰火」の冒頭は次のような書き出しで始まっている。

*

二十五の春、そのひしがたの由緒ありげな学帽を、たくさんの希望者の中でとくにへどもとまごつきながら願ひ出たひとりの新入生へ、くれてやつて、帰郷した。

山内祥史氏は、「陰火」の脱稿を「一応、昭和八年十月と、推測している³⁾。昭和八年とは、太宰治「二十五」歳の年であり、普通に行けば、この年の「春」、彼は大学を卒業するはずであった。従って、この「二十五の春」という書き出しには当然そのことが意識されていたはずだが、実際には彼はこの年に卒業することはできなかった。つまり、彼はこの年の卒業がもう不可能になったところに、彼の卒業後を予見してみせたことになる⁵⁾。あたかも、「此の夫婦」で、マルキシズム脱落後の自分の頹廢した未来を予見してみせたように。そこには一体どのような精神風景が描かれているのであろうか。この点については服部康喜氏のすぐれた指摘がある。

「陰火」は、一人の青年が帰郷する情景から始まっている。(略)そこには、こみあげる懐しみや感激という自然的な感情的要素は奇妙に希薄であって、むしろ、感傷は極度に乾き、抑制されていることに気づくであろう。

彼は、結局、自己を風景以上にも、それ以下にも望まないのだ。そ

して、風景はやがて通過する退屈きわまりないものなのである。かかる虚無が、誕生⁷⁾の無機的な文体を決定したのである。

作品では、冒頭の「二十五の春」から「三十」の夏くらいまでの、約五年間の生活が叙述されている。その間、卒業・帰郷・結婚・父の死・地位の相続・破産の危機・寺参り・母の死・隣町での放蕩・女兒の誕生などがあったが、これらの出来事がほとんど淡々と、あるいは無感動に、語られているのである。たとえば、父母の死に遭遇しても、そこには何の悲しみもなければ哀悼もなく、ただ△彼▽の目にした葬儀の様子だけが単なる事実として乾いた言葉で語られる。また△彼▽の結婚も「べつに早いとも思はなかつた。美人でさへあれば、と思つた。(略)ひとつき程は彼も新妻をめづらしたが」と、実にそっけなく語られるのである。△彼▽にとつては、△結婚▽も△死▽も△誕生▽も、隣町での△放蕩▽以上の意味をもたない。すべては時間とともに流れては浮かび、浮かんでは消えるそのとき限りのものであって、彼の心には何の痕跡も残さないのである。その意味では、文体はまさしく「無機的」であり、△彼▽の精神もまた「虚無」と表現する他ない。ところで、服部氏はもう一つ、見落とすことのできない重要なことをさりげなく指摘している⁷⁾。

そこでは、たとえば妻の不貞ですら重大事とはなりえないのである。それは彼には、せいぜい少し珍しい風景にすぎなかつた。否、大人の行為だけではない。生命の誕生という厳肅な事実すら、感動を呼ばない通過する風景に後退してしまっている。

この掌篇のどこかに「妻の不貞」を叙述した箇所があったらどうか。氏はこの直前で、△彼▽の隣町での△放蕩▽の部分を用いし、この直後に、誕生した女兒の説明箇所を引用しているだけで、「妻の不貞」をどこに読みとったかは何も記していない。従って、具体的なことは何もわからない。しかし、この掌篇にもし「妻の不貞」が叙述されているとすれば、それは、氏が引用した二つの箇所には含まれて氏があえて引用しなかった部分、つまり、次の箇所であればなるまい。

そのとしの春に、妻が女の子を出産した。その二年ほどまへ、妻が都の病院に凡そひとつきも秘密な入院をしたのであった。

この「秘密な入院」は、従来、研究者にとって不可解な謎であった。作者がこれ以外に何の説明もつけ加えておらず、妻の「秘密な入院」が何のために行われ、それがこの作品でどのような意味をもつか、全く不明だからだ。しかし、この「秘密な入院」が妻の△不義▽を暗示している、たとえば、入院を妻の不義による妊娠の中絶のため、と考えば、作品をうまく読み解くことができるように思える。

前述したように、「陰火」は一对の男女の△性▽が一つのテーマになっている。しかも、その△性▽を演ずる男女は、各篇ごとに独立した無縁の存在ではなく、各篇を通じてどこかで密接につながっているように思われる。四篇の△男▽たちがいずれも太宰治の分身を思わせるように、△女▽たちもまた、どこかで縦につながる関係性をもっているはずだ。あるいは、「誕生」の男の存在意味が△紙の鶴↓水車↓尼▽

と△逆行▽することで把握できるように、女たちもまた同じように△逆行▽していく関係性をもっているはずなのだ。逆に言えば、「誕生」の妻は「水車」や「紙の鶴」の女たちの延長上に位置する存在でなければならない。「水車」の女は、未婚のまま処女を喪い、男との類魔的な性関係を絶望的に結んでいる女である。また、「紙の鶴」の女は、結婚前に夫以外の男と性交渉を結んでおり、そのことを知った夫を苦悩の淵に落しこんでいる。つまり、△女▽の系譜を△水車↓紙の鶴↓誕生▽と辿るとき、前二篇にすでに結婚前の△性▽の頹廢と過失がみられる以上、「誕生」の妻が△不義の妻▽の役割を担っていても何の不思議もないのだ。彼女は、夫が結婚後わずかひと月ほど「新妻をめぐらしたが」ておわったとき、その心を夫から離れさせ、△不義▽という形で男女間の△性▽を演じる羽目に陥っていたのではあるまいか。女兒の誕生が「無機的」な文体で語られ、「大がかりな誕生祝ひ」はあってもそこに何の感激も喜びもないのは、もちろん△彼▽の心が人生に疲弊し、ものに感ずる心を失っているからだ。しかしそれはまた、女兒が「ひとつきも秘密な入院」をした妻から生まれた子であり、両親の△性▽の不徳を象徴するかのよう、「ふた親に似ない」色の白い子だったためでもありはすまいか。

しかし、それにしても、△彼▽はどうしてこのように疲弊し、どうしてこのような「虚無」を身につけてしまったのだろうか。作品中には、それに関する説明は一切ない。ただ次のような一節がかつての△彼▽をわずかに彷彿させるだけである。

寝てからも、むかし読んだ小型の詩集や、真紅の表紙に黒いハム

マアの画かれてあるやうな、そんな書物を枕元に置くことは、めつたになかった。寝ながら電気スタンドを引き寄せ、両のてのひらを眺めてゐた。手相に凝つてゐたのであつた。

△彼Vは、かつて、文学とマルキシズムに熱中した一時期をもつていたらしい。しかし、今はそんなものへの関心はとうに薄れ、ぼんやりと「手相」を眺めているのである。ここでは、いわば、△文学Vや△マルキシズムVと△手相Vとの落差が、そのまま△彼Vの△過去Vと△現在Vとの落差を象徴している。つまり、△彼Vの「虚無」は、文学の夢破れマルキシズムから脱落・敗北した後にもたらされたものなのだ。その意味では△彼Vの△生Vと△性Vは、「此の夫婦」の光一郎と全く同じ位相にあると言ってよい。そして、ここでもまた、夫婦間の△性Vの荒廃は主人公の△生Vの荒廃を意味している。帰郷後の△彼Vの無感動な生を「無機的な文体」で描いた作者は、それに「誕生」と名づけた。△彼Vと△妻Vとの△性Vの結末である女兒の△誕生Vに、その「虚無」を最もよく象徴させようとしたのである。「誕生」における△陰火Vは、この呪わしい△誕生Vの周囲に、青く妖しく燃えている。

*

「紙の鶴」には、「処女でない妻をめぐつて、三年間、その事実を知らずにごした」男が、その事実を妻の口から直接聞きだしたあとと苦悩が描かれている。もちろん、男の苦悩には、太宰治の最初の妻小山初代の結婚前の△性Vの過失によつてもたらされた、太宰自身の苦悩が反映されている。

妻の過失を知つた△おれVは、妻の「わるい過去」を思い出さなですむようと「年少の洋画家」を訪ねる。△おれVは道々、頭の中に昨夜のことが入りこまないように、「植物について頭をひねり」「秋の七草」の名を数え、「AプラスBの二乗の公式」を誦したりした。洋画家の部屋に入ると、彼の近作に対して「友人に言葉をさしはさむ余裕」を与えないほど饒舌をふるい、将棋をいどむが、やがてそれにも疲れる。友人の「寝床のなかへもぐり込」むと、「かなしい影」が「おれの胸をかすめる。」「とてもこのままではならぬ。おれは動いてゐなければいけないのだ」と思い、彼は「枕元に散らばつてあつた鼻紙」で「折紙細工」を始めるのである。

まづこの紙を対角線に沿つて二つに折つて、それをまた二つに畳んで、かうやつて袋を作つて、それから、こちらの端を折つて、これは翼、こちらの端を折つて、これはくちばし、かういふ工合ひにひつばつて、このちひさい孔からぶつと息を吹きこむのである。これは、鶴。

△おれVは妻の過去の△性Vの秘密を知つて衝撃を受け、その事実を記憶の中から追放しようとする。しかし、記憶は△おれVについて離れず、△おれVの心をさいなむのである。そのため、△おれVは始終動いていようとすが、ついには紙を折るという空しい行為の中に己を収斂させてしまう。そのとき、この掌篇中で唯一、この一節だけがこのような生命感のない文体になつたのである。ここにはすでに、妻の告白に衝撃を受け、さまざまに動きまわる△おれV

を語っていたときの、感情のなまなましい発露はない。ここだけが、感情の欠落した、いわば「無機質な文体」になっているのだ。これは、記憶を消し去るためのさまざまな試みの果てに、△おれ△の心に一種の△空白△が訪れたことを示唆している。△おれ△が折ったのは△鶴△だったのに、作品の表題は△紙の鶴△という生命感のない言葉に変質しているのも、この表題で△おれ△の心の△空白△や△空虚△を示唆したかったからに相違ない。太宰治にとって、初代を芸者の境遇から救い出して結婚することは、どこかで彼の革命的ヒロイズムにつながっていた。従って、△無垢△なまま救い出したと信じていた初代が他の男に汚されていたという事実は、彼の幼い革命理念を根底からつき崩す衝撃であった。△おれ△の心の△空白△とは、すなわち、妻の過去の△性△を知ったあとの、敗北感にも似た太宰治自身の心の中の△空虚△であったはずだ。

*

「水車」は、「憎くてたまらぬ異性にでなければ関心をもてない」不幸な男女の物語である。

女はけふも郊外の男の家を訪れて、男の言葉の一つ一つに訳のわからぬ嘲笑を浴びせたのである。男は、女の執拗な侮辱に対して、いまこそ腕力を用ゐようと決心した。女もそれを察して身構へた。かういふせつばつまつたわななきが、二人のゆがめられた愛欲をあふりたてた。男の力はちがつた形式で行はれた。めいめいのからだを取り返したとき、二人はみぢんも愛し合つてゐない事実をはつきり知らされた。

女と一緒に家を出た男は、「女のあとを追つてここまで歩いて」来たわけをあれこれ考える。最初は女への「みれん」かと疑う。しかし、そのうち「解決のためだ。いやな言葉だけれど、あとしまつのためだ」という「言ひわけ」を見つめる。二人は歩きながら、お互いに「妥協の許さぬ反発」と「以前にました憎悪」を感じていた。そして男は、「女のからだぢゆうから、我慢できぬいやな臭ひが流れて出てくるやうに」感じながら、「解決」のために次のようなことを考える。

○かんにんして下さい、とひくく女に囁けば、何か月なみの解決がつきさうにも思はれる。

○いつそ、けつこんしようか。いや、ほんたうはけつこんしないのだが、あとしまつのためにそんな相談をしかけてみるのだ。

○逃げよう。解決もなにも要らぬ。(略)どうせ男はかういふものだ。逃げよう。

○たつたひとこと言つてやらうか。おれは口外しないよ、と。(略)それとも、かう言つてやらうか。令嬢の生涯にいちど、奥様の生涯にいちど、それから、母親の生涯にいちど、誰にもあることです。よいけつこんをなさい。

しかし、男はこれらのいずれをも実行しない。そしてとうとう立ちどまり、「女が泣いてもゐないらしいのをいまましく思ひながら」あたりを見廻すのである。最後は次のように結ばれる。

ぢき左側に男の好んで散歩に来る水車小屋があつた。水車は闇のなかでゆつくりゆつくりまはつてゐた。女は、くるつと男に背をむけて、また歩きだした。男は煙草をくゆらしながら踏みとどまつた。呼びとめようとしらないのだ。

男は漫然とその場に止まつたのではない。「踏みとどまつた。呼びとめようとしらないのだ」とは、明らかにひとつの意志表示・意志決定の言葉である。男ははっきりと、女を追うことを断念したので。「解決」のための全ての方策を放棄したのである。「解決もなにも要らぬ」と思つただけではない。「逃げよう」とも思わないのだ。彼は、闇の中の水車がどのような小細工を弄することもなく、ただ、「ゆつくりゆつくりまはつて」いるのを見たとき、△解決△のための一切の小賢しい方策を放棄し、全てをなるようになれと、運命に任せたのである。たとえどんなに△女△に罵られることになろうと、どんなに社会的指弾を浴びようと、あるいはまた、明日以降も△女△との憎悪にみちた愛の泥沼にのめりこんで行くことになろうと、そのなるようにしかならない運命を、なつたがままに半ば自棄的に引き受けようとしているのだ。そこに見えるのは、自己決定力を放棄し、身を運命にゆだねてしまった男の、聞きなおり、ささくれたつてしまった△心△である。男は、心まで△水車△のように無心になつたわけではない。△水車△は全ての方策を放棄するためのひとつのきっかけにすぎなかつた。そしてこの作品でもまた、男女の△性△の在りようを通じて、男の荒廃した心をはっきりと垣間見ることができるのである。

以上、「誕生」「紙の鶴」「水車」とも、一対の男女の不毛な△性△を

描くことによって、いずれも男の△生△の不毛と頽廢を浮き彫りにしている。△性△を手段にして△生△の虚無を描くという「此の夫婦」で用いた手法が、この三篇ではさらに洗練されて機能していると言つてよい。このように考えるなら、△陰火△とは、一対の男女の△性△の深淵で不気味にゆらめく鬼火の謂いでなければならぬ。それは男と女の頽廢的な△性△を青白く照らし出しながら、△死△を迎えたかのような男たちの虚無的な△生△と△心△を、じりじりとあぶり出しているのである。

△三△

「尼」の主人公△僕△には、△性△のパートナーがいない。従つて、彼の△性△が語られることもない。そのかわりに△尼△と△如来△という一対の△性△が、△僕△になりかわつて、△僕△や前三篇の男たちの△生△の意味を、換言すれば、これらの男たちに仮託された太宰治の△生△の意味を語ってくれる。語るのは主に△尼△である。

△尼△は九月二十九日の「夜の十一時半ごろ」、△僕△の部屋に現われた。△僕△は「あと一日がまんをして十月になつてから質屋へ行けば、利子がひと月分まうかと思」い、「煙草ものまずにその日いちにち寝てばかりゐた」のである。現われた△尼△に△僕△は次のように反応する。

僕は、ああ妹だなと思つたので、おはひりと言つた。(略)だしぬけに恐怖が襲つた。息がとまつて、眼さまがまつくろになつた。

「よく似てゐるが、あなたは妹ぢやないのですね。」はじめから僕

には妹などいなかつたのだな、とそのときはじめて気がついた。

このあと△尼▽は△僕▽に「おふみさま」⁽¹⁾を読んできかせるが、聞いていた△僕▽は次のように言う。

誰ともわからぬひとの訪問を驚きもしなければ好奇心も起さず、なんにも聞かないで、かうして眼をつぶつてらくらくと話し合へるといふことが、僕もそんな男になれたといふことが、うれしいのです。

△僕▽には妹などいないのに、どうして△尼▽を妹だと思ったのだろうか。また、見ず知らずの△尼▽の訪問を、どうして△僕▽はこのように自然に受け容れることができたのだろうか。満足な筋立てもなく、徹底的に△お伽噺▽風に仕立てられたこの作品では、登場人物たちの言動にこめられた意味を象徴化して考察していくしかない。たぶん作者は、△尼▽を妹と見間違ひさせ、△僕▽の△尼▽への心理的障壁を消滅させることで、△僕▽の△尼▽への親近感を示し、さらには、△僕▽の△尼▽への人物移行を試み、完了させているのだ。「僕もそんな男になれたといふことが、うれしい」という述懐や、質屋の利子を気にしながら生きる荒涼とした生活ぶりを考えれば、この△僕▽が太宰治の分身として設定されていることは間違ひなからう。このあと△尼▽は、△僕▽に「お伽噺」として「蟹の話」を語るが、△尼▽の語る「蟹の話」もまた、太宰治を念頭に置かなければ理解できない。つまり△尼▽は、太宰治の分身である△僕▽を前に、△僕▽になり代わって太宰治を語る存在として機能していることになる。従って、「お伽

噺」を語るのは△尼▽であって、実は△僕▽でもあるわけだ。

ところで、「お伽噺」に進む前に、△尼▽のもつもうひとつの属性を見ておかねばなるまい。△僕▽に人物移行する前の△尼▽は、やはり△女性▽としての役割をになつて登場しているからだ。△尼▽は「喉や何かはひどくきれいなのに」、「爪が二分ほども伸びて、指の節は黒くしなびてゐた」とされる。△僕▽が「あなたの手はどうしてそんなに汚いのです」と問うと、△尼▽は「汚いことをしたからです」と答えて、「おふみさま」を読むことになる。

夫人間ノ浮生ナル相ヲツラツラ観ズルニ、オホヨソハカナキモノハ、コノ世ノ始中終マボロシノゴトクナル一期ナリ、(略)夫女人ノ身ハ、五障三従トテ、ヲトコニマサリテ、カカルフカキツミノアルナリ(後略)。

△尼▽はこの一節を「てれくさくて読まれるものか」「馬鹿らしい」と言いつつ読むが、作者がわざわざこの一節をぬき出して△尼▽に読ませた理由は明らかである。「女人」を△男にまさりて深き罪あるもの▽と断ずる根拠を、すでに作者は「誕生」「紙の鶴」「水車」の三篇で提出済みだからだ。女を△深き罪あるもの▽とする思想は、この三篇で演じられた女たちの△性▽をぬきにしては成り立たない。従ってまた、「汚いことをした」という△尼▽の言葉も、彼女たちの△性▽ぬきには解釈できない。△尼▽は彼女たちの犯した△性▽の汚点を負うものとしても造形されているのだ。⁽¹⁾「ハカナキモノハ(略)マボロシノゴトクナル一期ナリ」というもうひとつの仏教思想は、そのような

△女Vたちの△性Vをくぐりぬけた果ての△男Vの精神の空白、ないしは、諦観を示していると考えられよう。

さて、△尼Vの語る「お伽噺」はこの掌篇のクライマックスである。

ああ、その大蟹に比較すれば、小さくて小さくて、見るかげもないまづしい蟹が、いま北方の海原から恥を忘れてうかれ出た。月の光にみせられたのです。砂濱へ出てみて、彼もまたおどろいたのでした。この影は、このひらべつたい醜い影は、ほんたうにおれの影であらうか。おれは新しい男である。しかし、おれの影を見給へ。もうはや、おしつぶされかけてゐる。おれの甲羅はこんなに不恰好なのだろうか。こんなに弱弱しかつたのだらうか。(略)おれには、才能があつたのであらうか。いや、いや、あつたとしても、それはをかしい才能だ。世わたりの才能といふものだ。お前は原稿を売り込むのに、編輯者へどんな色目をつかつたか。(略)甲羅がうづく。からだの水気が乾いたやうだ。この海水のにはひだけが、おれのたつたひとつのとりえだつたのに。潮の香がうせたなら、ああ、おれは消えもいりたい。もいちど海へはひらうか。海の底の底の底へもぐらうか。なつかしきは昆布の森。遊牧の魚の群。小蟹は、あへぎあへぎ砂濱をよるばひ歩いたのでした。

「北方の海原」から浮かれ出た「蟹」とはもちろん太宰治の分身である。「砂濱」とは、自身の思想と才能を実現すべく意気揚々と乗り出して行った、△他者Vたちの住む世界である。海底深くゆらゆら揺らいでいる「昆布の森」とは、△他者Vに出会う前の融和に満ちたなつ

かしの△故郷Vのことであろう。この「蟹」が「砂濱」に出て来て見出したものは、△他者Vのために「おしつぶされかけてゐる」自分の「醜い影」であつた。これは本当に、「おれの影であらうか」と疑つては見て、△他者Vの中に見出した自己はどこから見ても卑小で「弱々しく」、「不恰好な」存在でしかない。「たつたひとつのとりえだつた」「海水のにはひ」、つまり、彼が△故郷Vの中で自然に育んだ弱気、言い換えれば、彼がもっていた精神の美しさも純粹さも、△他者Vたちの世界の中で見るかげもなくひからび、萎びてしまったのだ。彼は「昆布の森」へ帰ることを夢想するが、太宰治の実生活に即して言えば、すでに昭和五年の「分家除籍」以来、彼は△故郷Vへ足を踏み入れることはできなくなっていたはずだ。

ここには、彼が何に「おしつぶされ」、どうしてその「弱々し」さを自覚したのか、具体的なことは一切書かれていない。しかし、ここで語られているのはまぎれもなく、青春後期以降、太宰治が△他者Vの世界で喫した無残な敗北の姿である。本稿冒頭に記したように、彼が本格的に△他者Vと出会い、自己を客体化できるようにするのに最も力があつたのはマルキシズムである。そのマルキシズムに本格的に出会つたのが昭和二年。太宰治の革命意識が最も高揚していたのはたぶん東大に入学した昭和五年の春、秋にかけての頃である。しかし、同年秋の小山初代の出奔を契機とする分家除籍処分、鎌倉での心中未遂、左翼からの脱落意識の刻印、自首、と続く約二年間の出来事は、太宰治の心に決定的な敗北感と挫折感を与えていた。また、それは、彼の幼い革命的ロマンティシズムの崩壊をも意味していた。彼が、「おしつぶされかけてゐる」自分の「醜い影」を意識したとすれば、それはひ

とつにはこの敗北感と密接に関わっていたはずである。そして、彼のもうひとつの頼みであった文学も、政治運動と絶縁するまでは、明瞭な形をとって結晶するには到っていなかった。その点でも彼は、「おれには、才能があつたのであらうか」という不安を抱かざるをえなかった。要するに、彼は「砂濱」と名づけられた \wedge 他者 \vee たちの世界で、マルキシズムに敗北し、文学に頓挫していたのだ。この掌篇の冒頭で \wedge 僕 \vee の荒涼たる生活を垣間見せた作者は、その背後にある挫折と敗北を、 \wedge 尼 \vee に「お伽噺」風に語らせたのである。挫折した \wedge 僕 \parallel 太宰治 \vee には、もう明確な生の方向も見えてこない。彼は「古事記」の歌謡に託して「この蟹や、何処の蟹。(略)横去らふ。何処に到る」とうたうしかない。どこに到るのか、自身でもわからぬまま「あへぎあへぎ砂濱をよろはひ歩」くしかないのである。

ところで、以上の \wedge 挫折 \vee と \wedge 不安 \vee を語った \wedge 尼 \vee は、いかにも「お伽噺」風になり、「十二時」になるとあわてて眠ってしまい、 \wedge 如来 \vee と交替する。この掌篇での唯一の \wedge 性 \vee のペアである \wedge 尼 \vee と \wedge 如来 \vee はこのあとすれ違っただけで、決して同じ舞台に立つことはない。それはあたかも、前三篇の男女の \wedge 心 \vee が、すれ違っただけで、ついに一度として重なりあうことがなかったことと符合しているかのようである。さて、登場した \wedge 如来 \vee は仏としての気品や気高さを微塵ももっていない。

如来はいくぶん、いや、おほいに痩せこけてゐた。肋骨が一本一本浮き出てゐて、鎧扉のやうであつた。ぼろぼろの褐色の布を腰のまはりにつけてゐるだけで素裸であつた。かまきりのやうに痩せ細つ

た手足には蜘蛛の巣や煤がいつばいついてゐた。(略)顔はこぶしほどの大ききで、鼻も眼もわからず、ただくしゃくしゃと皺になつてゐた。

\wedge 如来 \vee のこの異様でみすばらしい風体は、直接的には \wedge 尼 \vee の \wedge 汚れた手 \vee と対応している。女が汚れていた分だけ、男も貧相なわけだ。しかし、それはまた、蟹に託された太宰治の敗北感とも照応している。挫折による心のダメージが深ければ深いほど、その風体や容貌もそれに見合うように、みすばらしく貧相でなければならぬ。 \wedge 如来 \vee の風体は、蟹の「醜い影」がそうであつたように、男の敗北と、それに伴う惨めな \wedge 心 \vee を表徴しているのだ。さらに \wedge 如来 \vee は、 \wedge 生きた象 \vee に乗りたかつたのに、実際には、樟脳をつめた \wedge 死んだ象 \vee に乗ってやって来た。この \wedge 死んだ象 \vee は、当然、 \wedge 如来 \vee の精神そのものの \wedge 死 \vee を暗示している。敗北の後にやって来た精神の死である。 \wedge 尼 \vee の \wedge 汚れた手 \vee が女たちの \wedge 性 \vee の汚点を暗示していたように、 \wedge 如来 \vee の異様な風体と \wedge 死んだ象 \vee は、前三篇の男たちの、そして作者太宰治自身の \wedge 死せる心 \vee を表徴しているのだ。

最後に如来は、いかにも太宰風な軽薄な「気取り」を撒き散らして退散する。残された \wedge 尼 \vee は、「眠つたままにここに笑つてゐた。」その笑いは \wedge 恍惚 \vee とも \wedge 侮辱 \vee とも \wedge 無心 \vee とも \wedge 諷刺 \vee とも \wedge 喜悅 \vee とも、いかようにもとれる不可思議な笑いであつた。そのうち \wedge 尼 \vee はだんだんちいさくなり、ついには「一寸ほどの人形」になつてしまふ。 \wedge 僕 \vee はその「人形」をしさいに調べ、「人形」の「墨染めのころものすそをかるく吹いたり」してみるのである。しかし、

「僕」が何をしようと、それはもはや何の反応も示さない。いわば一種の物体になってしまったのだ。△敗北▽と△挫折▽のあとにやってきたものは、何ごとにも反応しない、無機質で、無感動な精神の空白だったのである。人形になった△尼▽は、△女▽から再度△僕▽に人物移行し、その無感動な精神の空白を象徴しているのである。もちろん、この無機的で無感動な精神は、「誕生」の男がもっていた精神の△虚無▽に通じている。「誕生」の男の△虚無▽は、△紙の鶴▽水車▽尼▽と△逆行▽することによっても明らかにしうるし、「尼」から「誕生」へと△逆行▽して見ていくことも可能である。しかし、いずれにしても、「尼」で示された精神の空白は、「誕生」における精神の虚無へと循環することで作品として完結するのだ。そして、その内容を支えているのは、△性▽を手段にしてマルキシズムに敗北したあとの△生▽の不毛と頹廃を描くという、「此の夫婦」で用いた手法をより高度に洗練させた、太宰治の方法意識であった。

△註▽

- (1) 「無間奈落」と「虎徹宵話」の執筆時期は、山内祥史編「太宰治全集」12（筑摩書房）の「解題」に拠る。
- (2) 平岡敏男「太宰治の学生時代」（『国文学』一九六三年四月）。
- (3) 山内祥史「陰火」（『太宰治必携』学燈社、一九八一年三月）。
- (4) 註1の「全集」1の「解題」に拠る。
- (5) 奥野健男「晩年」（新潮文庫）の「解説」。
- (6) 「陰火」も、「晩年」に収められた他の多くの実験小説同様、いわゆる「旧稿」を加筆・再構成して出来あがった可能性が高い。だと

すれば、「陰火」の脱稿は「一応、昭和八年十月と、推測」できるにしても、「誕生」はそれ以前に、早ければ、卒業予定の昭和八年三月よりも前に執筆されていた可能性もある。

(7) 服部康喜「太宰「陰火」論——風景の深層——」（『活水日文』第六号、一九八二年三月）。

(8) 拙稿「太宰治におけるコミニズムと転向」（『兵庫教育大学 近代文学雑誌』一九九〇年一月）を参照されたい。

(9) このくだりは、この女が「奥様」になって、つまり「誕生」における△妻▽となって、もう一度△性▽の過ちを犯す可能性があることを示唆していないだろうか。もしそうだとすれば、「誕生」の△妻▽は間違いなく「水車」の女の延長上に造型されているのである。

(10) これが連如上人の書簡集「御ふみ」であることを、傳馬義澄氏「『陰火』論」△「解釈と鑑賞」一九八〇年一月▽と赤木孝之氏「太宰治「陰火」論——その『陰火』的なるもの——」△「国士館 国文学論叢」第十号 一九八九年三月▽が指摘している。

(11) 赤木孝之氏は註10の論文の中で、この「汚いこと」を、「恐らくは性的なニュアンスを含んでいるもののようにも思われ、(略) 女性の悲しさが暗示されている」と解釈しており、筆者もこの一節に示唆をうけた。

(12) この点については、註8の拙稿を参照されたい。コミニズムが太宰治の精神に与えた影響と傷痕は、決して通り一遍のものではなかった。

以上